

『按粵疏稿』卷 3.
『日本一鑑』窮河話海卷 6.
『日本一鑑』窮河話海卷 6 海市.
『海澄県志』卷 1 輿地志建置.
『籌海図編』卷 3 広東事宜.
『籌海圖編』卷 4 福建倭変紀.
『籌海図編』卷 4 福建事宜.
『籌海圖編』卷 5 浙江倭変紀.
『籌海図編』卷 12 開互市.
『国朝猷征録』卷 62.
『明世宗実録』卷 154.
『明世宗実録』卷 189 嘉靖 15 年 7 月壬午条.
『明経世文編』卷 280 馮養虚集 通番舶議.
『明経世文編』卷 353 徐中丞軍務集録卷 1 請設大城参將疏.
『明経世文編』卷 400 敬和堂集卷 5 疏通海禁疏.
『明経世文編』卷 433 徐中丞奏疏.
『甓餘雜集』卷 3 増設県治以安地方事.
張燮『東西洋考』卷 6 外紀考.
張燮『東西洋考』卷 7 餉稅考.
崇禎『海澄県志』卷 1 輿地志.
崇禎『漳州府志』卷 1 輿地志上 建置沿革.
崇禎『海澄県志』卷 5 賦役志 2.
崇禎『海澄県志』卷 14 災祥志.
乾隆『福建通志』卷 74 芸文.
万曆『漳州府志』卷 30 海澄県 輿地志 建置沿革.
万曆『漳州府志』卷 30 海澄県 雜志 兵乱.
万曆 29 年『広東通志』卷 69 澳門.
張燮『東西洋考』卷 7 餉稅考.
朱国禎『涌幢小品』卷 30 倭官倭島.
光緒『潮州府志』卷 38 征撫 蔡春魁.
光緒『潮州府志』卷 38 征撫 吳平.
光緒『潮州府志』卷 38 征撫 甲子所賊.
嘉靖『潮州府志』卷 1 地理志.
嘉靖『広東通志』卷 14 輿地志 2.

第 6 章

16-18 世紀における太平洋を跨ぐ 水銀の密貿易

アンゲラ・ショッテンハマー（鈴木英明編訳）

第1節 はじめに

1622年にフロリダ・キーの沖合で沈んだスペイン・ガレオン船から50.26グラムの水銀が発見された事件は世界的な関心を集めた。このガレオン船は、ヌエストラ・セニョーラ・デ・アトチャ号といい、金、銀、銅、タバコ、宝石類、そしてインディゴを積み、スペインへと向かっていたとされる。とりわけ、鉱物学と医学とに関しては、コリー・マルコムが述べるように、「1622年当時の科学的実践の在り方」をそこからつかみ取れるかもしれない(Malcom 2006)。スペイン人は、1554年にはアマルガムの「パティオ・プロセス」という銀精錬に関する画期的な技術を再発見したばかりであった。それは、12世紀の北アフリカでアラブ人たちによって最初に用いられたものだが、それによってより大量の銀を鉱石から取り出すことが可能になる。この技術は1504年にセヴィーリヤで生まれたバルトロメ・デ・メディナによって広く知られるに至る。彼は「パティオ・プロセス」をヌエバ・エスパーニャのパチュカで最初に試み、その後、それは瞬く間にアメリカ大陸のスペイン領各地の銀鉱山で広く用いられるようになった。この技術の拡散は、とりわけ、有名なポトシ銀山という新たな銀の源泉が見つかった1545年、顕著になる。翌年には、メキシコでファン・デ・トロサによってサカテカスの巨大な銀鉱が発見されもした。新世界におけるこうした巨大な銀の源泉の発見は、銀精製に関するアマルガム法の再発見と同時並行した現象であったことは大いに注目に値する。

バルトロメ・デ・メディナはこの技術に関する知識を「マエストロ・ロレンツォ」あるいは「レオナルド」として知られたドイツの錬金術師から獲得したといわれている。銀(金)鉱石はラバを動力にした石製粉碎機で水を加えながら、ペースト状になるまで粉碎さ

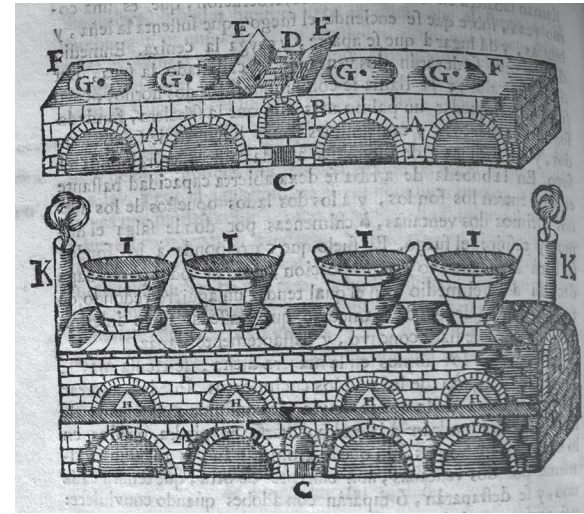


図6-1 アルバロ・アロンソ・バルバ『諸金属の技術』収録の銀アマルガムを熱するための炉を紹介する版画。本挿絵は1770年マドリード版のもの。(Álvaro Alouso Barba, *Artes de los metales*, madrid: la Viuda de Mannel Fernandez, 1740, 114.)

れる。そうしてできたペーストはパティオの日陰に広げられ、そこに水銀、塩、硫酸銅がふりまかれ、それを人間、あるいはラバが踏み歩き、十分に混ぜ合わされる。この作業はときに数週間に及ぶ場合もあった。その後、それをよく洗浄し、残ったアマルガムを絞り、熱することで水銀は飛ばされ、銀(金)が残るのである。この「パティオ・プロセス」は質の悪い鉱石にも用いることができ、銀(金)鉱山での生産を劇的に改善することができた。新大陸で産出されたのはほとんどが銀であったが、同様のプロセスは金にも適用できた。金と銀とが混ざって採掘される場合、プロセスの結果、得られたものは「ドレ」と呼ばれ、通常は、そのままの状態ですぐに船に積み、目的地についてから双方を分離させる工程が行われた。

ポトシやサカテカスから産出される莫大な量の銀は、大西洋と太平洋とに向けて船積みされた。一枚で通常のスペイン・レアル銀貨の8枚分の価値があったことから「レアル・デ・ア・オチョ」と呼ばれた銀貨は、その後、2世紀以上にわたって国際通貨として世界中で広く流通した。また、18世紀の後半以降、こうした銀貨は福建を中心とする中国の沿海部でもその流通量が増加していった。初期近代には、おびただしい量の銀貨が中華帝国に行きつく。デニス・フリンとアルテューロ・ヒラルデスによれば、「この供給サイドの現象は、需要する側の中国における一條鞭法を頂点とする銀の価値の想像を絶する上昇と年代的に符合するという思いがけない出来事だった。供給するスペイン領アメリカでの生産コストの低減と、中国にけん引された需要する側であるアジアにおける銀価格の上昇との結びつきは、おそらく人類史上、もっとも劇的な鉱山ブームを引き起こしたのである」(Flynn and Giráldez 1995: 209)¹。ただし、若干の注意を喚起するならば、16世紀から17世紀初頭にかけて、日本が中国にとってのもっとも重要な銀の供給者であったのを忘れてはならない。

スペイン帝国はふたつの主要な水銀の産地を抑えていた。ひとつはスペインのアルマデンであり、もうひとつはペルーのワンカベリカである。植民地期、アルマデンの水銀のほとんどはメキシコの銀山で用いられた(Lang 1968: 632-641)。1563年、しかしながら、ワンカベリカで辰砂が発見される。これによって、スペインから莫大な費用をかけて水銀を持ち込まなくても、ペルーで銀の精製が可能になった。しかし、1572年の9月、ヌエバ・エスパーニャの副王マルティン・エンリケス・デ・アルメイダ(1510頃～1583)は、後述するように、水銀の自由貿易を禁止し、政府の監督下に置く(Bakewell 1971: 150)。その後、植民地期を通して、基本的にはスペイン王室は水銀の生産と流通を独占する。スペインからの水銀輸送

は莫大な費用が掛かる一方、ワンカベリカの水銀鉱山は王室の直接の管理下に置かれた。

このような背景のもと、非合法の水銀輸入が行われるようになったのは想像に難くない。それは、フィリピン諸島とアカプルコとを結ぶマニラ・ガレオン交易の一環として、主として中国からヌエバ・エスパーニャとペルーに向けられた。マニラ・ガレオン交易は1565年から1815年のあいだ行われ、水銀はそこで取引される交易品の一部であった。フィリピン諸島はこのガレオン交易にはわずかな交易品しか提供していないが、香辛料、絹、陶磁器、金、象牙、宝石類、翡翠、水銀、その他の交易品が中国やそのほかのアジアの港から運ばれ、この交易を利益の高いものにした。1573年以来、福建のジャンク船でマニラへと運ばれた中国産の水銀は、フィリピン諸島からヌエバ・エスパーニャへと向かう積み荷のなかで重要な位置を占めた。水銀はさまざまな国の商人によって扱われた。「中国からフィリピン諸島を経由する水銀は、ヌエバ・エスパーニャの鉱業の豊かな歴史において、軽んじられ、もっとも無視されてきた存在である」とエドワード・スラックは2012年に述べている(Slack 2012: 113)。ヌエバ・エスパーニャの水銀市場における中国の役割に関する初期の研究は、マーヴィン・ラングによるスペイン王室のメキシコにおける水銀の独占に関する歴史研究(Lang 1977)の中にみることができる。

本章では、東アジア海域から出発し、大西洋をまたいで新大陸へと向かう水銀の密貿易について、東アジア海域と新大陸の多様な集団が織りなす様々な関係をひも解きながら、その背景と実態とを考察する。

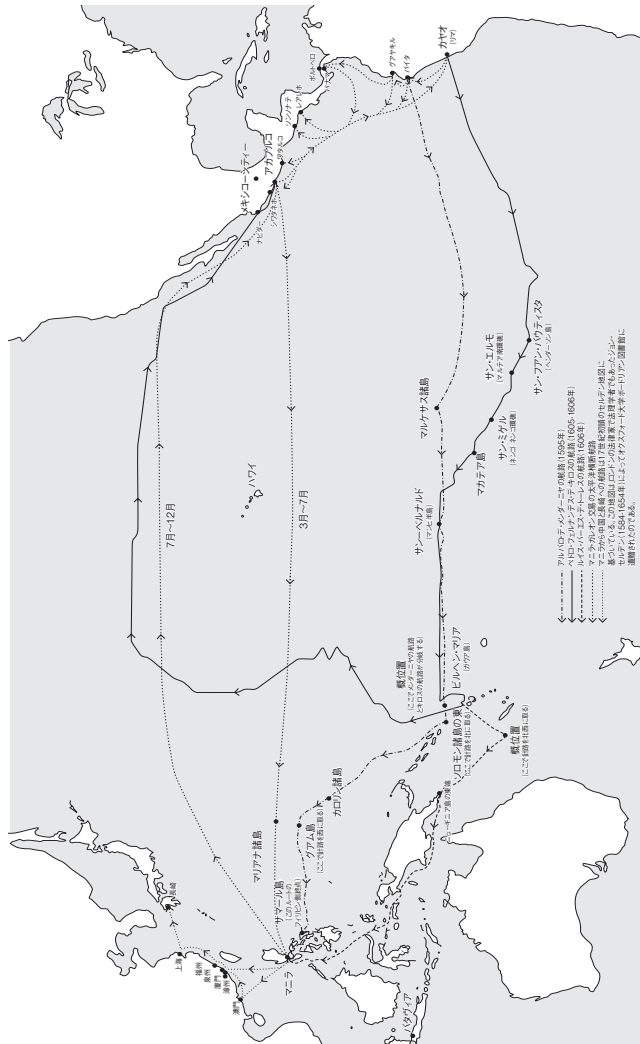


図6-2 フィリピンと両アメリカ大陸を結ぶマニラ・ガレオン交易と初期の太平洋横断航路

第2節 水銀をめぐる東アジア域内、および環大西洋の諸関係

2-1 中国—マカオ—日本

ポルトガル商人アルフォンソ・パエスは、マカオに関して次のような報告を行っている。すなわち、おおよそ500ピクルあるいはそれ以上の莫大な量の水銀が毎年、「中国のインド人、厦門からやって来る人びと、そして大中国からやって来る別の人びと」によって、日本市場向けに広州とマカオに運び込まれていると伝えている（Iwasaki Cauti 1992: 170-179）。マカオを訪れたメキシコ商人メルコール・デ・メダーノは広東や「チンチェオ Chincheo」（漳州を指すが、それとともに泉州も含まれていると考えるべきだろう。また、福建の沿海部一帯を指す場合も見受けられる第5章も参照）で大量の水銀を目にしている。同じくメキシコからやってきたフリアン・ゴメス・デ・エスコバルは1580年代に広東を訪れているが、広東やそのほかで日本向け輸出のために水銀が収集されているのを目撃している（Iaccarino 2017: 168）。イタリア商人のピエトロ・グリフォは1591年、当時、在住していたマカオでいくばくかの水銀を日本市場での販売目的で購入している。売却の後、彼はメキシコへと移住するのだが、水銀取引について記述を残している。そこからは、厦門とマカオ間の取引、中国商人とポルトガル商人とのあいだの取引、そして日本への水銀輸出が確認できるばかりでなく、輸送に関する詳細についても情報を得ることができる。水銀は陶製の缶や鉢に入れた状態で運ばれ、最終的には固い丸形の木製の箱に移し替えられるのであり、それぞれ半ピクルの水銀が入っている（Iwasaki Cauti 1992: 176）。また、この事例からは日本向け水銀取引に投資することで大きな利益が得られることも読み取ることができる。中国製の絹と水銀を日本市場で売りさばくことができれば、少なく見積もっても10倍の利

益が得られるのである。

広東では1580年代、1ピクルの水銀は銀28から33両で売られており、平均をとれば約銀30両——37.5ペソ——であった(Iwasaki Cauti 1992: 176)。マニラではピクルあたり60から70ペソのあいだで取引されていた。1592年、フィリピンの第7代総督ゴメス・ペレス・ダスマリーニャスは、中国人が1ピクルあたり100ドゥカートを要求していたと述べている(AGI, Filipinas, 18B, R.2, N.5, Carta de G. P. Mariñas sobre situación general (1592/05/31))。

1562年成立の『籌海図編』に収められた「倭好の好みの色々」とされる記事のなかで、銅器へのめっき付けに用いられるものとして水銀が言及されており、中国の30倍の価格、すなわち300両で日本では売ることができるとされている(鄭 2007: 199)。1600年ごろ、ポルトガル商人は150から300ピクルの水銀を毎年、マカオから日本へ送っていた。広東での価格はピクルあたり40両で、マカオでは53両であったが、日本では90から92両で取引されていた(Ptak 2002: 55)。

オランダ人たちもまた日本に水銀をもたらした。一例を挙げると、1636年には、262.87ピクル、価格にして33,864両相当の水銀を彼らはマカオから長崎に運んでいる(Boxer 1984: 26)。『オランダ商館長日記』にはそれ以外にも複数の水銀輸入の記事が散見される。マカオ、広東、廈門が日本向け水銀の主要な積出港であった。しかし、ポルトガル人や中国人と較べると、オランダ人や日本人にとって、中国産水銀は遠い存在であった。彼らは現在のタイやインドネシアで中国産水銀を購入していた(Ptak 2002: 55)。1640年以降、この海域でイギリスがより重要な位置を占めるようになってからは、彼らも中国で購入した水銀を日本で売ようになった(Ptak 2002: 56; Kato 1976: 66; Morse 1926: vol.1, passim)。

1637年、181.205ピクル、価格にして15,715両の水銀が日本

にもたらされ、翌年には8,762.20両に相当する92.355ピクルがやはり日本へと運ばれた。ここから分かるのは、1562年には1ピクルあたり90から91両だった日本での水銀の売値が、この時期、86.70両から121.80両の間で推移していた事実である(Boxer 1959: 194)。この貿易でもっとも活動的だったのは中国商人、ポルトガル商人、のちにはオランダ商人となる。エドワード・スラックはジェメリ・カレリ(1651-1725)の記録をもとに次のような事実を指摘している。すなわち、ヌエバ・エスパーニャでは正規に取引されるペルー産やカステイーリャ産の水銀に王室が高額の税金をかけていることで水銀不足を招き、それがメキシコを不毛にさせていることをカレリは認識したうえで、彼は中国産の水銀を買値の3倍の価格で売りさばいたのである(Slack 2012: 116)。

2-2 ヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)—フィリピン諸島—日本

徳川家康はポルトガルやオランダ以外にも、スペインやヌエバ・エスパーニャとも——それが長続きすることはなかったものの——交易関係を結んでいた。

1609年、スペインのガレオン船サン・フランシスコ号がマニラからアカプルコへの帰路、日本列島近海で転覆した。370人の漂流者は日本の漁民に助けられ、そのなかにはフィリピンの総督に就任したばかりのロドリゴ・デ・ビベロ・イ・アベルーサも含まれていた。日本では、彼は江戸に赴くなどし、徳川政権とスペイン帝国とのあいだの直接的な商業関係を築き、日本で建造したサン・ブエナベンチャーラ号でいく人かの日本人を従えてアカプルコへと戻っていった。アカプルコからメキシコ・シティに使節団を送り、そこで一行は副王ルイス・デ・ベラスコに謁見している。1595年、ヴェラスコはペルーの副王に任命され、その任を1604年まで果たした。のちに彼はメキシコに自らの拠点を再び定め、彼の甥であるビベロ

が日本からアカブルコに戻ってきた時も健在であった。

一連の複雑な外交交渉 (Iaccarino 2017: 189-217) の後、最終的にビベロは1610年の夏、宣教師ルイス・ソテロの仲介のもと、徳川政権とスペイン帝国とのあいだの最初の、そしてきわめて独特な協定を準備し、署名をした (AGI, Filipinas, 193, n. 3; Iaccarino 2017: 331-332 (apéndice n.5))。協定の条項はビベロの覚書のひとつに補遺として付されており、日付は1610年5月2日、あて先はメキシコ副王とスペイン王 (ドン・フェリペ) となっている (Vivero y Velasco 1989: 160-192)。しかしながら、この文書は基本合意書の類として理解されるべきである。なぜならば、フィリピン総督を解任されたビベロには正式な協定を締結する力はなかったからである。このような文書が有効になるにはスペイン王とメキシコ副王の双方による署名がなされなければならない。われわれにとって興味深いのは、協定の第5条で明確に日本人が「スペイン人鉱山夫が日本にやってきて、王国が産出する莫大な量の銀の採掘を手助けすることを望んでいる」と記されていることである。ビベロ自身は鉱業の専門家であり、フィリピンに向かう以前は、有名なメキシコのタスコ銀山での作業に従事していた経験を持つ (Monbeig 1972: 8)。家康はヌエバ・エスパニャから50名の鉱山夫を呼び寄せるように依頼している。これに対して、ビベロはそれが次の条件ならば合意されるべきだと回答している。その条件とは、スペイン人が100あるいは200名の鉱山夫を送った場合、現在、未開発だけれども、その技術と産業とによってスペイン人が開発し、操業するようになるすべての鉱山から採掘される銀の半分が無償でスペイン人のものとなり、残りの半分は二分割され、片方を日本の王、もう片方をスペイン王が手に入れるというものであった。すなわち、半分以上をスペイン人鉱山夫が独占し、スペイン王が4分の1、そして残りの4分の1が家康と日本のものになるということである。しかし、ウバルド・イアッカリ

ノが明らかにしているように、家康は採掘されるすべての金属の4分の3をスペイン人たちに譲渡することすら許していた。というのは、マニラとの関係が築ければ、それは彼が渴望する新世界の銀精錬の新技术に関する知識をもたらすはずだったからである。また、スペイン人鉱山夫による採掘が実現すれば、家康は鉱山からの搾取のシステムに手を加える必要もなかった。(これらの鉱山はそれまで、私的な、そして在地の権力によって運営され、所有者たちは徳川政権に一定量の金属を供出するのみであった。とはいえ、徳川政権はほとんどの鉱山の運営に自前の商人などを介してかかわっていた) (Iaccarino 2017: 210)。すでに操業されている鉱山に関しては、鉱山所有者はスペイン人と新たな取り決めを交わさなくてはならなかっただろう。そこでは水銀の使用が必要になるはずであり、鉱山所有者たちはその調達に責任を持つことになったであろう (Vivero y Velasco, 1989; AGI, Filipinas, 193, n.3; AGI, Filipinas, 193, n.3; Iaccarino 2017: 202-203)。これらの合意を確立する一方で、しかしながら、家康はオランダ商人を日本から追放せよというビベロの要求は拒絶していた (Vivero y Velasco n.d.)。

家康とその息子秀忠がレルマ公爵フランシスコ・ゴメス・デ・サンドバルに1610年に送った書簡では、フランチェスコ会修道士のルイス・ソテロに全幅の信頼を寄せていること、そしてメキシコから日本にやってきたナウ船について明確に言及されている。メキシコのどこから船が来ようと、船は歓待と贈り物をもって迎えられ、すべてはルイス・ソテロに任されていた。家康の側近であった本多正純は1610年2月2日付でより詳細な記録を残しているが、そこにはスペイン人鉱山夫の日本派遣のことも、フェリペ3世のことも触れられていない²。協定がスペイン人に有利なのは明らかであった。日本の鉱山で採掘された金や銀の75%がスペイン人の手に入るはずだったし、鉱山は治外法権下におかれ、オランダ人は日本から追放され、すべての港はスペイン人に開かれ、教会建設や

宣教活動の権利も与えられるはずであった (Iaccarino 2017: 239-240)。しかし、多方面から反対が寄せられ、日本国内ばかりでなく、オランダ、イギリス、ポルトガルの商人たちはもちろん、そしてスペイン王室も異議を唱えた。その背景には、ヌエバ・エスパーニャが(王室を介さない)自前の、独立した商業交易ルートを確立することを懸念したことが挙げられる。

一方で、フィリピンに対する、そしてより一般的にアメリカ大陸のスペイン植民地に対する家康の意図は明らかである。彼はメキシコそしておそらくペルーとも商業的な関係性を構築したかったと思われる、なおかつ、船舶工学や鉱業技術の分野におけるスペイン人の知識からも利益をあげたいと考えていた。加えて、彼はメキシコ鑛造局 (Ceca de México) やセビーリャの通商院などスペインの制度のいくつかを模倣するつもりもあった (Iaccarino 2017: 240)。

太平洋を横断する船舶を所有していなかった徳川家康は、1602年、ヌエバ・エスパーニャまで航海するための試運転として、押収したオランダ船リーフデ号を堺まで航行させている。それより2年早くに日本に到達したイギリス人によれば、家康は自前の船舶でヌエバ・エスパーニャへの航海を目論んでいた (Pérez 1929: 143; Iaccarino 2017: 272)。オランダ人やイギリス人の来港は、明らかに、スペイン人の日本における活動を大いに脅かした。とりわけオランダ人が公式に布教活動を放棄したのちに日本に足場を築いたことは、スペイン人がかつて謳歌した徳川政権との良好な関係に大きな楔を打ち込んだ。とはいえ、この関係が破たんするのにはもう数年の時間が必要だった。

1614年、日本で建造された最初の西洋式帆船のひとつであるサン・ファン・バウティスタ号——元来は日本語で伊達丸と呼ばれていた——はヌエバ・エスパーニャに向けて大西洋を航海した。これはスペイン式のガレオン船であった。そこには支倉六右衛門常

長を代表とする180名からなる外交使節団が乗船しており、ルイス・ソテロも随行していた。慶長遣欧使節として知られる彼らはアカプルコに寄港し、そこから教皇パウロ5世とバチカンへの使節としてヴェラクルスからヨーロッパへと針路をとった。

キリスト教禁教政策の開始とそのころに始まったキリシタン弾圧にもかかわらず、家康は商業活動を通してメキシコと良好な関係を継続しようという意図を有しており、なおかつ、彼は別の二隻をアメリカに派遣することすら公言していた。このことは彼がヌエバ・エスパーニャの副王に宛てた書簡のなかではっきりと言明されている (AGI, Filipinas, 1, n.151; Knauth 1972: 242-243)。家康はここまで述べてきたような経緯で形成されてきた友好関係を維持したいと望んでおり、そのことは1612年10月と翌年とにフィリピンへ送られた彼の書簡から読み取ることができる (Iaccarino 2017: 290)。

2-3 中国—フィリピン—メキシコ—ペルー関係

安価な中国産水銀についての情報はフィリピンを介してメキシコに集積された。初代フィリピン総督ミゲル・ロペス・デ・レガスピが1572年8月11日に書き残した文書には、興味深いことに、水銀が中国との交易で得られる産品としてすでに言及されている (Ollé 1999: 177)。とても安い価格に関する情報はたちまちメキシコの鉱山に知れ渡った。1キンタル (約49キロ・グラム) の中国産水銀は20から40ペソであり、それと較べてアルマデンやワンカベリカで採れる水銀は77から100ペソもした。1584年にはメキシコの主要な鉱山夫たちがフェリペ2世に覚書をしたためているが、そのなかで中国からの水銀輸入の許可を求めている (Iwasaki Cauti 1992: 162. AGI, Patronato, 238, n.3, “Petición de algunos mineros”, 1584, quoted in M. F. Lang, *El Monopolio*, p.137)。1年後、新総督サンティアゴ・デ・ベラ (在職1584年5月16日-1590年5月) はメキシコ大司教

ペドロ・モヤ・デ・コントレーラス (1527-1591) に宛てた書簡のなかで次のような意見を表明している。「閣下の命令に従って、私はこの地のサングレイたちに一定量の水銀を持ってこさせようとずいぶんと試みてまいりました」。しかし、この書簡によれば、水銀は「日本人のもとに持っていかれてしまいました。かの国では多くの銀鉱山があり、そこでは水銀に結構な値がつくのです」と続く (Blair and Robertson 1903-1909: vol.4, 68)。メキシコでは、副王ルイス・デ・ベラスコ (1534-1617) が 1591 年、ペルー産水銀について情報を有する人物すべてを調査するよう命令を下している。これはペルー産水銀の経費と現地での価格を把握するためであり、同時に中国産水銀の潜在的な価格と経費、量、そしてどこで誰から購入するかの検討を重ねた (AGI, México, 22: Relación de azogues para la China (México, 21.VII.1591); Iwasaki Cauti 1992: 163)。

日本との競争があったにもかかわらず、スペイン帝国の人びとにとって中国産水銀は驚くほど安価であった。第3代フィリピン総督フランシスコ・デ・サンデ・ピコン (1540-1602) は、1576 年に書いたフェリペ2世への手紙のなかで中国についてこのように述べている。「大量の小麦もあれば、金鉱、銀、水銀、銅、鉛に錫、すべての金属がある」 (Sande 1576: 13)。彼はのちにチンチェオの中国人商人たちが足しげく水銀をフィリピンに売りにやってくることを記録している。彼もまた中国のチンチェオからヌエヴァ・エスパーニャへ直行便で水銀を送ることによって、経費節減の可能性を示唆していた³。フィリピンの総督たちを輩出したカスティージャの有力家系であるロンキーリョ家は、トルデシリャス条約に関連して禁じられていたにもかかわらず、中国との密貿易の実行を決意する。第5代フィリピン総督ディエゴ・ロンキーリョは彼以前のその他の者たちと同じように、スペイン王室へ中国の征服を提案するにあたって真剣なアイデアを有していた (Iwasaki Cauti 1992: 62; Ollé

2000: 101)。

スペイン側の中国産水銀への強い関心とそれを獲得するための様々な試みにもかかわらず⁴、その実現には時間を要した。中国への銀の流出という懸念が中国産水銀購入の主たる障害であった。1630 年にはインディアス枢機会議がこの懸念に対して次のような反論をしている。すなわち、中国産水銀の購入によって失う以上にその水銀でより多くの銀を算出すればよいのだと。「そして、もし中国で絹や (自分たちで) 生産できない製品を銀で購入することが許されるならば、水銀に銀を費やすのにほかにどんな理由を付け加えればよいのだろうか」 (Bakewell 1971: 153)。その2年後、メキシコ副王のドン・ロドリゴ・パチェコ・イ・オソリオはこれと同じくらい説得力のある議論を展開している。曰く、「もし銀がスペイン王室の土地を離れなければならないのならば、中国ほどその損失が少ないところはなかろう」 (AGI México, 31, R. I, México 20 March 1632, Cerralvo to Crown; Bakewell 1971: 153)。しかし、メキシコの植民地政府は同時にフィリピンへの送金に難色を示しもした。なぜならば、そこがポルトガル領マカオに近いために「(銀の) イングランドへの簡単な抜け道となり、一度、そちらに流れてしまえば、スペインにたどり着くことなく、外国の、しかも敵の国家を潤わせる」ことを懸念したからであった (AGI México, 611, México 13 March 1662, “Respuesta del Fiscal”; Bakewell 1971: 153)。この構えが17世紀を通して様々に試みられたヌエバ・エスパーニャの鉱山に中国産水銀を供給する試みの失敗を招いたのである。明らかにこの時期にメキシコ、そしてなによりペルーに到達した水銀のほとんどが非合法的なチャネルを通過していた。たしかに、現在までのところ、明確に「密貿易者」と名指しできる個人名を、われわれはほとんど挙げるができない。とはいえ、スペインの独占と法的規定の不十分さに関する明白な事例は、チンチェオとマカオに住んでいたことのあるメ

キシコ住民のメルコール・デ・メドラノ、あるいは広東に5年間滞在し、チンチエオやそのほかの中国の港に滞在経験のあるフリアン・ゴメス・デ・エスコバル、あるいは、メキシコとペルーの鉱山夫にとっての重要性にかんがみて「詐欺的な行為を偽装し、あいまいに」しようとしたフアン・デ・オルトウニョ・デ・サヴァラといったフェルナンド・イワサキ・カウティが紹介する人物に関する事績のなかに認めることができる (Iwasaki Cauti 1992: 206-207)。

マニラからペルーへの密貿易の一例をここである程度、詳細に叙述しよう。1580年、ゴンサーロ・ロンキーリョ・デ・ペニャロサが第4代フィリピン総督になるために、450名以上の乗組員とパナマからフィリピンへ向けて出帆した。総督という地位は彼に環太平洋交易を自らの私的な目的に利用することを可能にせしめた⁵。1581年、彼はナウ船ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・チンタ号をフィリピンからペルーへと送る。そこは1561年にペルー市場の調査のために、かつて彼がペルーの副王ディエゴ・ロペス・デ・スニーガ・イ・ヴェラスコの随行員のひとりとして滞在した地であった (Iwasaki Cauti 1990: 133; Borah 2015: 117)。このヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・チンタ号はマニラとリマのあいだの直接交易の歴史を開いた船である。この航海で、ゴンサーロ・ロンキーリョの甥であるディエゴ・ロンキーリョは船長、フランシスコ・デ・サンタ・アナはマエストレ・デ・カンポ、ペドロ・ロドリゲスは水先案内人をそれぞれ務めている。積み荷は絹織物、陶磁器、胡椒、丁字、肉桂によって占められていたが、ロンキーリョは大砲に関する相互支援が主たる目的であると主張していた。実はすでに、アカプルコに荷揚げされた多くの中国製陶磁器が結果的にリマの店先に並んでいるという事実気付いたスペイン王室はロンキーリョの出帆に先立つ1579年4月14日に、ペルーとフィリピンの直接交易を実質的に禁止していた。したがって、ゴンサーロ・ロンキーリョ

は自身の計画について弁明をする必要があった。ロンキーリョはペルーにおける流浪者の問題に明らかに気が付いており、リマの港であるカヤオの不十分な防御態勢についても情報を得ていた。その結果、彼はペルーへ大砲を輸送する必要性を自らの計画に結び付けることで、後者を正当化したのである。最初の船団は1580年の夏にカヤオに送られたが、目的地に到達することはなかった。メキシコでの取り調べの後、3カ月後にはフィリピンに帰路をとっていた (Iwasaki Cauti 1990: 133-134)。ロンキーリョは翌年にかけてもう一度、同じ試みを行っている。メキシコではロンキーリョの送った船の顛末は、アジアとフィリピンからの産物の窓口としてのアカプルコの独占を脅かすという理由ばかりでなく、輸入品にかけられる税金を逃れているのではないかという根拠のある疑惑によっても、極めて不快なムードを醸成していた。フィリピンとペルーとの直接航海の禁止は、それゆえに、いくつもの文書で繰り返されている。もちろんロンキーリョは、ペルーの防御力を高めるために大砲を送るのだという理由で自らの航海事業を正当化し続けた。しかし、取り調べが明らかにしたところでは、300トンの絹、陶磁器、香辛料に加えて、半トン未満の重量の大砲1門のみというのが、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・チンタ号の積み荷の実際の内訳であった (Iwasaki Cauti 1990, 134-138)。

積み荷の所有者やその価値の分析は、スペイン帝国の官僚たちの王室への忠誠心と非公的活動との相克に関する興味深い実態をさらけ出す。所有者たちは一方では公僕であり、スペイン王とスペイン帝国を体現することを運命づけられている。しかし、他方では、彼らは富とより高い社会的地位を獲得しようと目論むいち私人なのである。ロンキーリョの上の一件は、この意味での相克、同様に環太平洋交易に関する汚職と密貿易の度合いを理解する非常に優れた事例になる。1583年、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・チンタ号

はカヤオから帰路に就くために出帆した。この直前にはスペイン王によってカヤオとマニラとのあいだの直接交易を中止する旨の勅令がリマに到着していた。この件に関連して、イワサキは、ファン・デ・メンドーサ・イ・マテ・デ・ルナ某というヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・チンタ号のこの航海に非正規の乗客として搭乗していたペルー人による未編さんの手稿を紹介している (Iwasaki Cauti 1992: 55ff, 70ff)。この船がマニラから運んできた商品が売りさばかれると、ロンキーリョはマニラに戻り、より多くの中国産品を市場に供給することを決意したという。同船は1583年の4月にはフィリピンに戻っている。

マカオで船団の船長のひとりが逮捕されたり、いくつかの事件が起きたのち、先の非正規の乗客は自身の経験を『ファン・デ・メンドーサ・イ・マテ・デ・ルナによってペルーのリマの町からフィリピンのマニラへ向かった旅について、1583年』にまとめた。

この文献はヨーロッパ人によって極東が描かれた最初期の部類に属する。加えて、たとえば、1585年にアウグスト会修道士のファン・ゴンザレス・デ・メンドーサによって書かれた『中国の偉大で全能な王国の歴史とその状況』は広く知られているものの⁶、フェルナンド・イワサキが強調するように、ファン・デ・メンドーサ・イ・マテ・デ・ルナの著作をもってすれば、この修道士の提供する情報にあまり信頼を置けなくなりもするのである (Iwasaki Cauti 1992, 70)。宣教師たちが記した中国に関する多くの記述と較べると、1583年のテキストは宗教的な称賛や信仰に関する報告が欠如している。その一方で、著者は寺院装飾や官吏の服飾、兵士の武器、鉄、布地、その他のありふれた事柄に関心を寄せている。一例を挙げるならば、性的行為や祭り、中国人の世俗的な活動に膨大なコメントがなされており、そこからイワサキはこの文献が商人の目を通して観察されたものであると結論付けている (Iwasaki Cauti 1992: 69)。

結局、彼は誰なのだろうか。もしかしたらディエゴ・ロンキーリョの助手だったのだろうか。あるいは、ペルーを追放された罪人だったのだろうか。残念ながら、残された手がかりからは確たる結論にたどり着くことはできない。

実は、宗教や宣教活動に焦点を当てていない中国に関する同時代記録はほかにも存在する。たとえば、1562年のミゲル・ロペス・デ・レガスピのフィリピン遠征に参加したスペイン人兵士ミゲル・デ・ルアルカのテキストは民間人目線で宗教色がなく、商業にも焦点を合わせている。托鉢僧マルティン・デ・ラダの記録や同時代のスペイン人イエズス会士アロンソ・サンチェスの記録もまたしかりである。

アロンソ・サンチェスは中国の富のなかに金、銀、水銀、銅、鉄や金属一般を言及する (Ollé 1999: 556)。「金属。多くの水銀があり、それらはバケツや容器にいれられて日本へと運ばれている。多くの銅、真ちゅう、錫、白銅もあり、鉄については、ルソンでは1ピクルあたり7リアルの値が付く」(Sánchez 1588)。

1595年から1602年までフィリピンの代理総督を務めたアントニオ・デ・モルガは1609年に『フィリピン諸島誌』を著しているが、これも聖職者の手によらない最初期のフィリピン史に関する著作であり、フィリピンにおけるスペインの初期の植民活動に関する最重要史料のひとつと目されている。イワサキによれば、1590年、リマに定着していたデ・モルガにはアジア人の親族がおり、アジア人の召使もいたという。イワサキは、デ・モルガと1588年に秘密裏にカヤオから出港した密輸船を指揮したペルー人ファン・デ・ソリスとの直接的な関係を想定している (Iwasaki Cauti 2013: 4)。ファン・デ・ソリスは6,000デュカトを積んでパナマを経由し、1590年にマカオに到着している。そこで彼は中国人仲介者から絹を購入するつもりであった。しかし、彼の資金はポルトガル人

によって没収され、結局、薩摩に流れ着く (Iwasaki Cauti 1992: 131-133)。中国とラテンアメリカとの直接的な交易は敏感な問題としてあり続けており、フィリピンのスペイン人商人たちもまた直接交易の禁止を訴え始めていた⁷。デ・モルガも『フィリピン諸島誌』でマニラ・マカオ間の密貿易——たとえば、大理石、ペルシアやトルコ産のカーペット、高品質の絹や織物——について記している (Ollé 2000: 153)。

16世紀末までにフィリピンを介した中国、日本、ペルーの交易関係は確立された。ゴンザレス・ロンキーリョによって先鞭がつけられたこのつながりは、スペイン王室の目からは、本質的に非合法なものであった。この太平洋横断航路の最初期には、原則的にはフィリピンのセブからペルーへ一隻の船だけが航海を許されていた。しかし、マニラ・アカプルコ間航路による大西洋横断航路の独占が1590年代初頭に強要される。1591年にはヌエバ・エスパーニャとペルーのあいだでの中国産品に関する限定的な貿易が許可されるが、1593年にそれは再び禁止される。1604年にスペイン王室は年間300トンの船3隻がアカプルコとペルーのあいだを航海することを許可するが、1631年、このふたつの植民地間の海上交易はまたもや厳しく禁じられる。これは明らかに中国産品のペルー流入を抑制するための措置であった (Borah 2015: 124-127)。しかし、アジア、とりわけ中国へのアメリカ銀流出に関連するすべての公的な禁止にもかかわらず、商品は流れていった。この事実は密貿易商人の伝記のなかにはではなく、むしろ、大西洋を股にかけた植民地官僚たちのつながりあいのなかに見出せる (Iwasaki Cauti 2013: 11)。スペイン帝国に仕えるこうした官僚たちこそが交易の監督と管理を委ねられたものたちであり、彼らは公的には大西洋をまたぐ交易のなかで行われる多くの商業活動を禁じる立場にあったにもかかわらず、この交易からあがる利益が膨大だったので——賄賂も横行していた——、

それを王室の政策のためにあきらめることはできなかった (Borah 2015: 125)。われわれはこのように、官的な交易活動と私的な交易活動の不格好な混交、そして時にはこのふたつの領域の公然とした競争をこの一連の過程のなかに見るのであり、同様に、官的な行政活動と私的な商業活動との矛盾もそこに認めるのである。

禁制にもかかわらず、アカプルコとカヤオの水銀交易は決して止まることはなかった。汚職と縁故主義は官僚的な管制を著しく傷つけた。おそらくもっとも外聞の悪い事件は、1585年にペルーのスペイン副王フェルナンド・トーレス・イ・ポルトガルによってファン・ペレス・デ・ラス・クエンタスを代表とする商会に与えられた利権だろう (Iwasaki Cauti 1992: 200)⁸。後者はこれ以前から長きにわたって水銀輸出に携わり、中国産品のペルーにおける密貿易に従事してきた人物であった (Iwasaki Cauti 1992: 207-208)。彼の商会は年間7,000キンタル (約322トン) の水銀を1586年1月から1589年12月までのあいだ、ポトシに独占的に輸送する。契約書には、この商会がすべての水銀を売り切るまでは、いかなる私商人も王室ですら水銀の取引を許可されない旨の条文が含まれていた (Orche and Amaré 2015: 66)。

第3節 ヌエバ・エスパーニャとペルーにおける中国産水銀？

とりわけ17世紀において、メキシコはかつてない規模で銀鉱石を採掘したが、それは水銀不足を招いた。マーヴィン・F・ラングは次のように述べている。「水銀不足の主な理由とは、王室がアルマデンでの生産に依存したからである」、「アルマデンで生産されたほぼすべてはヌエバ・エスパーニャにまわされた (中略) この鉱山は年間5,000キンタルの生産しか見込めなかった」 (Lang 1968: 633)。

いくらかの水銀はペルーのワンカベリカ鉱山からもたらされたが、王室当局はペルーからアカプルコへの輸送を著しく削減した (Slack 2012)。その結果、中国産水銀が頭をもたげる。

世紀転換期、ワンカベリカ鉱山は幾度かの危機に見舞われ、スペイン王室はついに中国産品の購入によって水銀不足を克服することを決意する (AGI, Lima, 34, n. 30: El Virrey a S. M. (Lima 2. V. 1601); Iwasaki Cauti 1992: 168)。ワンカベリカと中国のチンチェオの価格差は甚大であった。ワンカベリカでは1キントルあたり77ペソで、メキシコまでの輸送費を加えれば100ペソになる。他方、中国産水銀はメキシコまでの輸送費を含んでも20から28ペソであった (AGI, México, 22; Iwasaki Cauti 1992: 164)。1605年にメキシコ副王ファン・デ・メンドーサ・イ・ルナは中国産水銀のアカプルコへの輸入に関する王からの問いに、中国産水銀は純度が高く、広東で大量に入手できるだろう旨を返答している。そのうえで、「キントルあたり45ペソ5レアルの価格で、アカプルコへ年間1,000から1,500キントルの輸送が見込め、しかもその品質はスペインのアルマデン鉱山から持ってこられるものと同じだが、価格は2分の1以下 (アルマデン鉱山ではキントルあたり96ペソ4レアルであった) であった。モンテカルロスはそのゆえに、広東の水銀の継続的な輸入がもたらす利益について王に助言したのである」 (AGI, México, 26, n. 69 (10/28/1605); Slack 2012: 115)。

1606年、メキシコ副王は、4,000キントルの中国産水銀をペルーへ供給することをフィリピン総督に依頼することを命じた書簡を受け取る。ポルトガル商人ペドロ・デ・バエサ⁹はメキシコとペルーへの水銀輸送を請け負った。しかし、スペイン側の役人はこのポルトガル人がヌエバ・エスパーニャへ水銀以外にも商品を輸送することを疑う。しかしながら、マカオからマニラへの水銀輸送に関する契約の交渉は始められた。この共同事業については、ヌエバ・エス

パーニャの副王ルイス・デ・ベラスコも熱心な後援者であった。結果的に、スペイン人とポルトガル人とのあいだで数回の「水銀契約」が交わされる。1612年には、格段に大量の水銀が「マカオでポルトガル人からスペイン人によって購入され、中国からマカオを経由して新世界に到達したことが記録されている。200キントルがヌエバ・エスパーニャに到達した」 (Souza 1986: 72)。しかし、長期的な視野で見れば、中国からの水銀輸入はヌエバ・エスパーニャからの銀の膨大な流出を招くと危惧するスペイン王室の役人たちの反対によって、水銀の大量調達 は失敗に終わった。

1631年に、王室はペルーへの中国産水銀の輸入を認めるが、ヌエバ・エスパーニャの副王がこの計画を拒否する (AGI, Lima, 572, libro 20, folio 233)。中国の鉱物では新世界で求められる質を満たさないということがこの時に議論された (AGI, México, 31, n. 1 and n. 5; AGI, Lima: El Virrey a S.M. (Lima 22. IV. 1634); Iwasaki Cauti 1992: 169)。ペルーの鉱山夫マルティン・ムルガ・エルガルスが中国産水銀の高品質を証明する30年前のことであった。彼は、鉱物自体は高品質だが、精製が粗いことを指摘した。しかし、彼の報告がまともに向き合われることはなかった (AGI, México, 611: Memorial del capitán Martín Murga Ergaluz (México, 10.11.1662))。

M・F・ラングによれば、メキシコに到達した最初の水銀は、おそらくマニラの総督に送られた命令書の結果として1612年から1618年のあいだに輸入されたものである。サカテカスの「レアル・カジャ」の会計人フランシスコ・スピデ某によって発行された証明書は、中国産水銀がキントルあたり80ペソで現地の鉱山夫たちに購入されていることを伝えている (Lang 1977: 138)。ここで伝えられていることは、以下で引用する内容と基本的に合致している。しかし、それより早く17世紀の最初の10年にすでに中国産水銀が輸入されている証拠も存在するのである。

インディアス総合古文書館には「中国の水銀について」と題された写本が存在する (*Relación de Azogue para la China*, AGI, México, 22 (México, 21.VII.1591 al 12.II.1592); Iwasaki Cauti 1992: 170-179)。これは中国における水銀の価格や入手可能性について記されたものである。著者はエルナンド・デ・アブリエゴ・デ・ピネダというフィリピンに滞在経験のある船長とされる。彼はマニラで次のような経験をしたとされる。つまり、中国人のサングレイ (sangleys 旅商人) が5から6ポンド (75キロから90キロ程度) の水銀を8レアルで彼に売ろうとした。周囲の現地人は口々に、ペルーに持って帰れば、とても良い取引になると彼に語った。というのは、ペルーでは5ポンドの水銀が金貨26ペソ前後で取引されていたからである。この中国人のサングレイは、中国には水銀が豊富にあることをこの船長に語ったとされる。加えて、中国人たちが中国では水銀が安価であると語っていることも記録されている。こうしてアブリエゴ・デ・ピネダは、ヌエバ・エスパーニャへの中国産水銀輸出が生み出す大きな利益を計算するのである。特別な箱に入れた中国産水銀4,000キントルを太平洋をまたいでペルーに送り、そのうちの2,000キントルをペルーからメキシコに送ることも可能であると考えていた。というのは、この船長は、「鉄くず」を用いた新技術をもってすれば、銀鉱山で求められる水銀量は従来よりも少なく済むことを知っていたからである。ここでいう「鉄くず」とは鉄粉のことであり、1587年ごろにポトシで報告された銀精製の過程で鉄粉を加える方法は、大きな技術革新であり、これによって水銀の消費量を抑制することが可能になった。

また、この文書によれば、中国人はほかの商品とともに、大量の水銀を陶製の缶や鉢に入れ、それを堅く丸い木の箱に入れた状態で広東やマカオの町へと輸送する。それぞれの箱は半ピクルの水銀が入っている。その後、中国人はポルトガル人に水銀を売り、ポルト

ガル人は莫大な量を日本へと輸送する。しかし、一部はインドへと向かう。通常はピクルあたり30タエルであるが、ある年には価格が上がった。これは明らかにインドが通常よりも多い量を要求したからである。こうした情報も得ることができる。

ヌエバ・エスパーニャへ水銀を送るためには、この文書に従えば、まずチンチェオでそれを購入する必要がある。というのは、チンチェオではより安く入手できるからであり、その場合、マカオや広東への輸送費を抑えることができるのである。中国人も基本的には同様にチンチェオで買い付けている。購入したならば、次に水銀を自分の船にバラストとして積み込む。これによって、中国人に支払う輸送費を浮かすことができる。フィリピンへ針路をとる船の場合、1隻あたり2,000ピクルを積むことができ、フィリピンでこの積み荷をナウ船の港についてよく知る親方たちに手渡すのである。この方法ならば、輸送費用や法的な費用もかからない。もしも民間の船に輸送を頼むならば、輸送費用は安いだろう。チンチェオで購入したその他の商品に加えてバラストとして積み込むならば、輸送費用を安く済ませられる。アカプルコの港についたならば、そこから先に(リマへ)運ぶ場合、追加で4金ペソがかかる。当時、メキシコで3年目を迎え、それ以前に12年マカオに在住したポルトガル人商人アルフォンソ・パエズがこの件に関する証人として言及されている。

ドン・フアン・グラウ・イ・モンファルコンは1637年、『フィリピンの交易と商業について言及する王へ献呈した覚え書き』のなかで、新世界の鉱業を補助するためにフィリピンからアカプルコへ水銀輸出を提言している。また、水銀とともに中国人や日本人がフィリピンに運んでくる安価な銅を送ることもここで提言されている¹⁰。

ヌエバ・エスパーニャへ中国産水銀が運ばれたことを示すその他

の証拠はあるだろうか。1613年初頭、アカプルコの異端審問所の所長であった聖職者ドン・ペドロ・モンロイはメキシコの異端審問所に次のような書簡を送っている。

「ナウ船サン・アンドレ号が中国から200キンタルの水銀と布地を積載して到着した。このナウ船は順調な船旅をしてきたようで、船を訪れたが閣下に報告するようなものは何ひとつ見当たらなかった。私は小箱ひとつを添えて、ヌエバ・エスパーニャの異端審問所へ書類を一枚送った。

昨日、フィリピンの船長、アンヘル・デ・ラ・グアルダがやってきた。数人の死者を出したものの、彼自身はしごく健康である。彼を訪ねた折には小箱ひとつと一枚の書類しか見なかった」(Alberro 1993: 50; Palazuelos Mazars 2012: 89)。

この記事はあきらかにメキシコへの中国産水銀の輸送を示している。サン・アンドレ号が1613年1月5日にアカプルコに到達した際(Borao Mateo 2007: 16)には、あきらかに200キンタルの水銀が積み荷に含まれていた。1614年12月、サン・アンドレ号は再び水銀の積み荷とともに入港している(Palazuelos Mazars 2012: 115)。T・H・パルド・デ・タヴェーラによる『ビブリオテカ・フィリピナ』もまたフィリピンを経由した中国からヌエバ・エスパーニャへの水銀輸送を確認している。そこでは、「フィリピンへ銀を携えてやって来る船は中国で水銀を獲得することを目的としている」というペドロ・バエサの1607年10月の言が参照されている(Pardo de Tavera de Manila 1903: entry 1406, 216)。1608年1月14日の別の記事ではこの言が繰り返され、「これはとりわけ、中国で購入され、マニラに運ばれ、そこからヌエバ・エスパーニャへと運ばれる水銀の問題に関連している」と記されている(Pardo de Tavera de Manila 1903: entry 1412, 217)。

それより少しのちの1615年には、ラ・カピタナ号が明らかに

水銀を運んでいる(Palazuelos Mazars 2012: 115)。インディアス総合古文書館所蔵の文書からも、水銀がマニラのナウ船でフィリピンから運び出されていることを確認することができる(AGI, Filipinas, 212, n.1, Oficio de Juan de Larreo a Luis Cerdeño (12/02/1693); Palazuelos Mazars 2012: 193)。17世紀全体を通して、マニラとペルーのガレオン船はヌエバ・エスパーニャの銀鉱山のために水銀を輸送した(Palazuelos Mazars 2012: 193)。鉱山のある地域から来た黒人奴隷たちが水銀の袋を積み下ろし、牛皮で作った箱に詰め替え、メキシコ・シティまでのラバ輸送の準備を行った(Palazuelos Mazars 2012: 193)。これらの奴隷についてほとんど何もわかっていないが、ベアトリス・パラスエロス・マサルスによれば、ヴェラクルスで水銀の積み下ろしを行っていた人びとは「腐食の奴隷 esclavos de avería」として知られており、水銀の毒によって体を壊すとすぐに別の者が連れてこられた(Palazuelos Mazars 2012: 193)。

1689年、水銀不足がスペイン王室の目を再び中国に向けさせた。アルマデン鉱山の在庫は使い尽くされ、スペイン王室は神聖ローマ帝国とイドリアの鉱山から高額でも水銀購入をしようと折衝したのち(AGI Filipinas, 28, n. 153 (3/28/1689); 212, n. 1 (1692-1694); Slack 2012: 115; Lang 1968: 637)、再び中国に関心を向けたのである。マニラ総督のガブリエル・デ・クルセアレギ・イ・アッリオラは最終的に「中国で30キンタルを上限に水銀購入の準備を整え、そして、ヌエヴァ・エスパーニャ副王にそれらを送ること」を命じた(AGI, Filipinas, 212, La Corona al Virrey, (21/05/1689); Lang 1977: 141)。フランチェスコ会修道士アロンソ・デ・ベナベンテは1690年にメキシコから中国に渡ったが、それは中国で25から30キンタルの水銀を購入する命令を受けてのことだった。しかし、彼はそれに失敗し、ある広東商人の申し出を持ち帰っただけだった。この広東商人は貴州の開発を実行することを約束し、その準備資金として1,200万ペ

ソを前払いするように求めた。この申し出はリスクが大きすぎるとみなされたが、折衝はその後も続けられた。1692年、フィリピン総督ファウスト・クルサート・ゴンゴラが少量(1.5キント)の水銀を試供品としてメキシコのグアナフアト鉱山に送ったが、それは「ペルー産のもっとも純度の高いものよりも良く、アルマデン産の(水銀の)最高の結果」と同等であった(AGI, Filipinas, 331, L. 9, f. 71v-74r (02/08/1693); 15, R. 1, n. 43 (6/5/1695); Slack 2012: 115)。1692年12月1日付の書簡では、クルサートは中国産水銀の高品質について明言している(AGI, Filipinas, 15, R.1, n. 8, Carta de Fausto Cruzat sobre azogue de China (1692/12/01))。こうして、本格的な輸出が試みられる。1692年にフィリピンから一隻のサンパン船が水銀購入のために広東に航海し、翌年6月に53キントの水銀を積んで帰港した。しかし、メキシコまでの輸送費などすべての経費を足し合わせると、最終的に価格はアマルデンのものよりも高額になってしまった。さらに悪いことに、結局、水銀はメキシコには届かなかったのである。輸送を担当したサント・クリスト・デ・ブルゴス号がアカプルコの港に入る前の外洋で火事に見舞われてしまったのである(Lang 1977: 141-143)。1695年には、キントあたりおよそ63ペソで112キント超の水銀が購入された(Slack 2012: 115)。

あるいは、1697年、再び見舞われた水銀不足がヌエバ・エスパニーヤ副王を駆り立て、中国での水銀購入とそのアカプルコ輸送を求める書簡をフィリピン総督に送った。1698年6月3日付のフィリピン総督の書簡では、広東での水銀購入が報告されている(AGI, Filipinas, 17, R.1, n. 25, Carta de Fausto Cruzat sobre la compra de azogue de Cantón (1698/06/03))。価格がキントあたり84ペソになったことが水銀不足の深刻さを物語っている(Rodríguez Gallano 1985: 226-227)。

これらすべての文書は中国産水銀のメキシコとペルーへの輸送に

ついて言及しており、多くの場合は非合法のチャンネルを通ったものであった。しかしながら、1709年7月の証明書は中国産水銀の取引と使用とをいま一度厳しく禁じたものである。フィリピンからアカプルコへ向かう船は、水銀を積んでいないか注意深く検査され、密輸者は死刑すら宣告された(AGN, Cédulas originales 34, exp. 33, f. 66, La Corono al Virrey (09/07/1709))。中国産水銀を安定的に獲得しようとするスペイン人のすべての試みは、スペイン王室による水銀独占の試みの完全なる失敗を照らし出すとラングは指摘する(Lang 1977: 145)。ラングにとっては、水銀交易は資本の投下によってのみ発展することができたのである。しかし、王室の財政問題を考慮に入れば、王室のすべての試みは一種のドンキホーテ的な行動に過ぎなかった。逆に、もしも王室が十分な資本を有していたならば、王室はアルマデンやワンカベリカに投資することもできたであろう。したがって、中国から安価な水銀を調達するという発想は、根拠なき一種の楽観論の反映でもあるのである(Lang 1977: 145)。18世紀の文書からは、またもや中国からの水銀調達の試みを読み取ることができるが、結果的には、安定的で十分な調達を確立しようとしたすべての試みは失敗に終わっている¹¹。

我々ははやくも16世紀末には、すでに中国からの水銀購入と、太平洋横断交易の一環としてフィリピンを経由しヌエバ・エスパニーヤへと水銀を輸送する試みも認めることができる。しかし、対立する利害関係とスペイン王室の独占政策によって、それらが合法化されるのには時間を要した。どれくらいの水銀が中国から太平洋を渡ったのかについて、正確な規模をはかることはできない。「ヌエバ・エスパニーヤの銀精錬能力に対しては有益だが不十分な量の中国産水銀が頻繁にアカプルコに輸送されていたということは言えそうである」というのはエドワード・スラックの見解である(Slack 2012: 116)。彼にとっては、ヌエヴァ・エスパニーヤの鉱業への中

国の貢献は、むしろ、スペイン製よりもより入手しやすく、丈夫で安価な中国産綿製品を地元の労働者たちに提供したところにあるのである。

第4節 おわりに

中国では、アマルガム法への関心はどのように考えたとしてもあまり大きなものではなかった。この技術と水銀そのものをアジアでもっとも求めていたのが日本であった。中国、ポルトガル、オランダ、のちにはイギリスの商人が水銀交易に従事してきた。メキシコとペルーでは、銀生産の増加と十分な水銀のないことが相まって、地元の鉱業と商業とはアジア海域で取引されていた比較的安全な中国産水銀に関心を向けるようになっていった。

中国産水銀の入手のしやすさと価格の安さにもかかわらず、スペイン当局は中国産水銀の輸入を認めれば、中国への銀流出が悪化すると考え、水銀の輸入を長いあいだ認めてこなかった。スペイン王室とヌエバ・エスパーニャの商人たちとの商業的利益の対立もまた、たび重なる禁令の背景になっていたことはいうまでもない。

中国産水銀の新世界への輸出に関するこれまで挙げてきた情報をまとめるならば、以下のような結論に達することができるだろう。まず、太平洋を渡った水銀のほとんどは中国で産出されたものだった。次に、中国産水銀は主として福建の港（泉州）から輸出されたが、広東やマカオからも積み出され、それからまずフィリピン諸島を経由し、そこからメキシコやペルーへと運ばれていった。基本的には、水銀は広く知られるマニラ・ガレオン交易の一部だったのであり、それが合法、非合法であるかを問わず、まずアカプルコに向けて送られた。ただし、非合法輸送の場合には、アジアからペルーへと直行した事例も見出すことができる。また、スペイン王室とヌ

エバ・エスパーニャの実際の統治者のあいだに利害の対立があったのも明らかである。現地の役人たちは確かに王室の代理人の役を務めていたが、他方で、個人的な利益も求めていた。交易に関する限り、常に公私の境界線はあいまいなものになる。そして、この環太平洋交易に従事していたのは、中国、フィリピン、その他アジアの商人や「密貿易者」であったが、それら以外にも、スペインやメキシコ、ペルーの商人、さらにはアルフォンソ・パエスのようなポルトガル商人、ペドロ・グリフォといったイタリア商人、オランダ商人、さらに18世紀後半にはフランス商人などもそこに参画していた。このような多様な出自の商人集団の実態と彼らの形成したネットワークについては今後の研究を待ちたい。

ヌエバ・エスパーニャの港町に具体的にどのようにして水銀が運ばれたのか、だれが実際にかかわっていたのかを伝える史料について、量的には我々はさほどのものを持っていないが、状況を察するに、水銀交易の禁止と独占の試みによって、ほとんどの水銀は非法のチャンネルを通ったと考えられる。中国産水銀がヌエバ・エスパーニャの銀産出に及ぼした衝撃に関して、我々は推察することしかできない。現在までに入手可能な情報からは大きな影響を及ぼしたと言いつけることはできないだろう。しかし、ここで明らかにした交易ネットワークは、たしかに高いレベルでの国際的なつながりあいを浮き彫りにしている。今後、この交易に従事した沈船から新たな考古学的知見が得られたり、いまだ見逃されてきた文献から情報を得たりすることができるならば、この多面的な試みについて、われわれはより一層の理解を深めることになるだろう。

*本章は、Angela Schottenhammer, "Trans-Pacific Connections: Contraband Mercury Trade in the Sixteenth to Early Eighteenth Centuries," in Tamara H. Bentley (ed.), *Picturing Commerce in and from the East Asian*

Maritime Circuits, 1550-1800, Amsterdam: Amsterdam University Press, 2019, 159-193 を基に、著者と編訳者とが連絡したうえで、一部修正したものである。

注

- 1 (Flynn and Giráldez 1996; Flynn and Giráldez 2001: 261-272) も参照せよ。
- 2 この書簡はルイス・ソテロによるスペイン語翻訳版しか現存していない。Ibid.
- 3 *Relación de Azogue para la China, AGI, México*, 22 (México, 21. VII. 1591 al 12. II. 1592); Iwasaki Cauti 1992: 177。
- 4 17世紀の水銀の危機的な不足はスペイン王室に中国からの水銀輸入を真剣に検討させた (Lang 1977, 138)。
- 5 ゴンサーロ・ロンキーリョはフィリピン到着後、自らの家族に役職と権限を与えている (Iwasaki Cauti 1990: 123-169, 130)。1582年、彼は、ポルトガル人をフェリーペ2世に従属させるという名目のもとにナウ船をマカオに送ったが、現実には、ペルーに輸送するための中国産品の仕入れを目的としていた。このときの航海に同行していたのが、イエズス会宣教師のアロンソ・サンチェスである。彼はのちの1583年に *Relación que trajo el Padre Alonso Sánchez del estado de las cosas de la China* と題する見聞録を著しており、これはイエズス会のコミュニティのあいだで広く読まれた。https://archive.org/stream/historicmacao00jesugoo/historicmacao00jesugoo_djvu.txt (最終アクセス日 2017年3月1日) を参照せよ。アロンソ・サンチェスとともに、1582年にマカオへ送られた2人のフランシスコ会修道士 (ファン・ボブレとディエゴ・ベルナル) は、同年に平戸を訪れている。詳細については、Ollé 2000 を参照せよ。
- 6 この著作はヨーロッパ人の手によって書かれた中国の歴史に関する最初期の、そして最も広く知られている著作のひとつであるが、著者自身は中国に足を踏み入れていない。彼は中国を訪問した人びとから情報を集成して著作を書き上げている。著作は刊行後にすぐにいくつかの言語に翻訳され、ヨーロッパで広く読まれた。英訳は1588年、ロバート・パークによってなされており、1853年にはハクルート・ソサエティの叢書第一巻として再版されている。これは現在、オンラインでも利用可能である (第1巻 https://archive.org/details/historyofgreatmi14151gonz; 第2巻 https://

archive.org/details/historygreatand00mendgoog (最終アクセス日 2014年3月から2017年3月)。また、(González de Mendoza 1990) は最新の校訂になり、(García 2015) はこの著作の中国記事について詳細な検討を施した博士論文である。

これに先立つ著作としては、*Gaspar da Cruz, Tratado das cousas da China* (1569) と *Bernardino de Escalante, Discurso de la navegacion que los Portugueses hacen a los Reinos y Provincias de Oriente, y de la noticia que se tiene de las grandezas del Reino de la China* (1577) がある。このふたつの著作こそが、メンドーサの著作の第一部の主要な情報源となっている。また、マネル・オレが説明するように、メンドーサの第一部にはポルトガル語文献が大きな影響を及ぼしている (Ollé 1999, 26, 131, 283, n. 436)。しかしながら、明らかにメンドーサは先に言及したファン・デ・メンドーサ・イ・マテ・デルナのマニュスクリプトは用いていない。この未校訂のマニュスクリプトは、現在、スペイン王立歴史アカデミーに所蔵されている (この情報については、マネル・オレから得た)。

- 7 詳細については、たとえば (Tremml-Werner 2015: 129-133) を参照。
- 8 ペドロ・デ・バエサはモルッカ、フィリピン、マカオ、日本で異なる役割を担いながら、ポルトガル王室へ仕えた (Boxer 1959: 179-184)。
- 9 ルソン、およびパンガシナンの一部については、彼が注意を促したように、金資源が豊富で、カマリネスのバラカラでは1626年に新たな鉱脈が発見されている (Torres de Mendoza (ed.) 1864-1884: Vol.6, 379-380, 438; Iaccarino 2017: 281-283)。
- 10 たとえば、1786年にはドン・ピセンテ・バサドレという人物がカルロス3世に対して、中国との通商関係を確立し、カリフォルニア産のカワウソやアシカの皮革をもって中国に行き、水銀を大量に仕入れる提案をしている。この人物はこの計画を実行に移し、フィリピンに赴き、最終的には中国に1年以上滞在した。彼は乾隆帝や清朝の役人に対して、多額の贈り物をもって説得することを試みたが (皇帝には15,000ペソから20,000ペソ、また、役人に対しては10,000から15,000ペソを贈ったとされる)、最終的には水銀価格の問題からこの計画は失敗している (AGN, Cédulas Reales Originales, 135, exp. 127 (21/11/1786); Cédulas Reales Originales, 141, exp. 152 (20/11/1788))。

参考文献

[文書館略号]

AGI: Archivo General de Indias.

AGN: Archivo General de la Nación de México.

【欧語文献】

- Alberro, Solange, 1993, *Inquisición y Sociedad en México, 1571-1700*, México: FCE.
- Bakewell, Peter John, 1971, *Silver Mining and Society in Colonial Mexico: Zacatecas, 1546-1700*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blair, Emma and James Alexander Robertson, eds., 1903-1909, *The Philippine Islands, 1493-1803*, 55 vols. Cleveland, Ohio: The Arthur H. Clark Company.
- Borah, Woodrow Wilson, 2015, *Early Colonial Trade and Navigation Between Mexico and Peru*, New York: ACLS Humanities e-book.
- Borao Mateo, José Eugenio, 2007, “The arrival of the Spanish galleons in Manila from the Pacific Ocean and their departure along the Kuroshio stream (16th and 17th centuries),” *Dili yanjiu* 47: 17-38.
- Boxer, Charles R., 1959, *The Great Ship from Amacan: Annals of Macau and the Old Japan Trade, 1555-1640*. Lisboa: Centro de Estudos Históricos Ultramarinos.
- , 1984, *Seventeenth Century Macau in Contemporary Documents and Illustrations*. Hong Kong: Heinemann Educational Books.
- Flynn, Dennis O., and Arturo Giráldez, 2001, “Arbitrage, China, and World Trade in Early Modern Period,” in Dennis O. Flynn, Arturo Giráldez, and J. Sobredo, eds., *The Pacific World: Lands, People and History of the Pacific, 1500-1900*, vol.4, Burlington: Ashgate Publishing, 261-272.
- Flynn, Dennis O., and Arturo Giráldez, 1995, “Born With a ‘Silver Spoon’: The Origin of World Trade in 1571,” *Journal of World History* 6-2: 201-221.
- , 1996, “China and the Manila galleons,” in Flynn and Giraldez, eds., *World Silver and Monetary History in the 16th and 17th Centuries*, Brookfield: Variorum.
- García, Sola Diego, 2015, *La formación de un paradigma de Oriente en la Europa moderna: la Historia del Gran Reino de la China de Juan González*

de Mendoza. Ph.D. dissertation. Barcelona: Universitat de Barcelona.

- González de Mendoza, Juan, 1990, *Historia de las cosas más notables, ritos y costumbres del gran reyno de la China* [Rome: 1585], ed. by Ramón Alba. Madrid: Editorial Miraguano y Ediciones Polifemo.
- Iaccarino, Ubaldo, 2017, *Comercio y Diplomacia entre Japón y Filipinas en la era Keichō (1596-1615)*, PhD dissertation. [East Asian Maritime History, 13] Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Iwasaki Cauti, Fernando, 1990, “La Primera Navegación Transpacífica entre Perú y Filipinas y su Transfondo Socio-Economico,” *Anuario de Estudios Americanos* 47: 123-169.
- Iwasaki Cauti, 1992, *Fernando, Extremo Oriente y Perú en el Siglo XVI*. Madrid: Edición MAPFRE.
- Iwasaki Cauti, 2013, “Primeros contactos entre Perú y Japón en el siglo XVI”, paper presented at the Peruvian Embassy in Tōkyō, 11 October 2013; online at <http://embajadadelperuenjapon.org/140/Presentacion%20Fernando%20Iwasaki/Presentacion%20Fernando%20Iwasakies.pdf> (accessed 28.08.2014).
- Kato, Eiichi, 1976, “The Japanese-Dutch Trade in the Formative Period of the Seclusion Policy, Particularly of the Raw Silk Trade of the Dutch at Hirado, 1620-1640,” *Acta Asiatica* 30: 34-84.
- Knauth, Lothar, 1972, *Confrontación transpacífica. El Japón y el Nuevo Mundo hispánico. 1542-1639*, México: Instituto de Investigaciones Históricas UNAM.
- , 1968, “New Spain’s Mining Depression and the Supply of Quicksilver from Peru, 1600-1700,” *The Hispanic American Historical Review* 48-4: 632-641.
- Lang, Mervyn F., 1977, *El Monopolio Estatal del Mercurio en el México Colonial (1550-1710)*, México: Fondo de Cultura Económica.
- Malcom, Corey, 2006, “Mercury on a Galleon,” *The Navigator: Newsletter of the Mel Fisher Maritime Heritage Society* 22-2, online version <http://www.melfisher.org/pdf/Mercury-on-a-Galleon.pdf> (accessed on February 27, 2017).
- Monbeig, Juliette, 1972, *Rodrigo de Vivero (1564-1636). Du Japon et du bon gouvernement de l’Espagne et des Indes*. Paris: SEVPEN.
- Morse, Hosea Ballou, 1926, *Chronicles of the East India Company Trading*

- to China, 1635-1834, 4 vols. Oxford: Claredon Press.
- Ollé, Manel, 1999, *Estrategias Filipinas Respecto a China: Alonso Sánchez y Domingo de Salazar en la Empresa de China (1581-1593)*, Ph.D. dissertation. Universitat Pompeu Fabra.
- , 2000, *La invención de China. Percepciones y estrategias filipinas respecto a China durante el siglo XVI* [South China and Maritime Asia, 9]. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Orche, Enrique and María Pilar Amaré, 2015, “Transporte de Mercurio desde Huancavelica a Potosí en el Perú Colonial,” *De Re Metallica* 25: 53-74.
- Palazuelos Mazars, Béatrice, 2012, *Acapulco y le galion de Manille, la réalité quotidienne au XVIIème siècle*. Ph.D. dissertation. Université Paris III-Sorbonne Nouvelle.
- Pardo de Tavera de Manila, T.H., 1903, *Biblioteca Filipina: ó sea catálogo razonado de todos los impresos, tanto insulares como extranjeros, relativos á la historia, la etnografía, la lingüística, la botánica, la fauna, la flora, la geología, la hidrografía, la geografía, la legislación, etc., de las Islas Filipinas, de Joló y Marianas*. Washington: Library of Congress and the Bureau of Insular Affairs, Government Printing Office.
- Ptak, Roderich, 2002, “Almíscar, Calambaque e Azogue no Comércio Macau-Japão e no Comércio da Ásia Oriental (cerca de 1555-1640),” *Revista de Cultura/Review of Culture* 2: 47-61.
- Rodríguez Gallano, Adolfo, 1985, “Notas para el Estudio del Azogue en México en el Siglo XVII,” *Estudios de Hisotria Novohispana* 8-8: 223-241.
- Sánchez, Alonso, 1588, “Relación de las cosas particulares de la China, la qual escribio el P. Sanchez de la Compañía de Jesús que se la pidieron para leer a su Magestad el Rey Don Felipe II estando indispuesto,” Madrid, 1588, Biblioteca Nacional Sección: ms.287, ff.198-226 (online under <https://www.upf.edu/asia/projectes/che/s16/sanchez.htm>, provided by Manel Ollé; accessed on April 20, 2017)
- Sande, Francisco de, 1576, “Carta a Felipe II del Gobernador de Filipinas, doctor Sande. Da cuenta de su llegada y accidentes de su viaje; de la falta que hay allí de todo, y habla de Religiosos, minas, de la China, Mindanao, Borneo, etc.,” AGI, Aud. de Filipinas, 6 (Manila, 7 de junio de 1576) .
- Slack, Edward R., Jr., 2012, “Orientalizing New Spain: Perspectives on Asian Influence in Colonial Mexico,” *México y la Cuenca del Pacífico*, 15-43: 97-127.
- Souza, George Brian, 1986, *The Survival of Empire: Portuguese Trade and Society in China and the South China Sea, 1630-1754*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Torres de Mendoza, Luis, ed., 1864-1884, *Colección de documentos inéditos relativos al descubrimiento, conquista y organización de las antiguas posesiones españolas América y Oceanía*, 42 vols., Madrid: Imprenta Española.
- Tremml-Werner, Birgit, 2015, *Spain, China, and Japan in Manila, 1571-1644: Local Comparisons and Global Connections*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Vivero y Velasco, Rodrigo de, 1989, *Relación que hace D. Rodrigo de Vivero y Velasco, que se halló in diferentes quadernos y papeles sueltos, de lo que se sucedió bolbiendo de Gobernador y Capitán general de las Philippinas, y arribada que tuvo en el Japón* (1632), s.f., in Juan Gil, *Mitos y utopías del descubrimiento*, 3 vols., vol. 2: *El Pacífico*, Madrid: Alianza Editorial, 160-192.
- Vivero y Velasco, Rodrigo de, n.d., *Testamento de Don Rodrigo de Vivero, gobernador y capitán general de la ciudad de Manila y sus Yslas*, s. f. (ca. 1608) online at http://bdmx.mx/detalle/?id_cod=55 (accessed on April 20, 2017).
- 【中国語文献】
鄭若曾著，李致忠編，2007，《籌海圖編》北京：中華書局。